

「オーウ、お前とこが萬屋金兵衛、萬金<sup>よろぎん</sup>かへ、私等兵庫の若い者や、伊勢詣りの下向で、始終三人や、泊て貰へるか」

「へエ、有難うさんで……これ〳〵大勢さんやで早う風呂を沸しや、大きい方の風呂を……あんさん方三人様がお宿取りで」

「そや、三人宿取りや」

「へエ〳〵、お荷物は帳場へお預り致します……コレ、お焼物は皆揃ふか……エー此のお笠を拜借致しますて表へ釣らして頂きます」

「笠が何ぞになるかえ」

「お連さんがお見へになりましたら目印に」

「お連て何や」

「へエ、あんさん方三人様がお宿取りで」

「そうやが」

「後の四十人さんは」

「オイ違ふ、俺等始終三人や、お前とこへ泊つてやるねん」

「エーッ、始終三人ですか……オイ違ふ〳〵たつた三人や、ナニ焼物を皆切つた……菓子碗も拵へた

……風呂も焚いた、甚い騒動やがな、仰山物がモチ<sup>も</sup>になつた、たつた三人……」

「オイ、たつた三人で氣に入らんのなら他所<sup>よそ</sup>へ行くで」

「どう致しまして、どうぞお泊りを……コレ早うお洗水<sup>すすぎ</sup>を持つといで」

「オ——イ、水や——」

「そないに火事場へ行つた様に云ひないな」

三人が足を洗ひまして、

「オイ、一ツ威勢ように二階へ上つたらか、ヤアトコセ——ヨオイヤナ——アリヤリヤ、コレワイセ、サ、ナンデモセ——」

「甚い勢いやな、モシ且さんお静に」

「オイ、俺等の云ふてる事が解らんか、お伊勢詣りの下向やで、音頭を取つたら不可んのか」

「イ、エ、音頭は構ひまへんが、後の且さんが草鞋を片方履いたまゝ上つてで御座ります」

「オイ誰や、草鞋を履いて上つたりして、そんな無茶な事を仕ないな……オイ間は何處や」

「七番へ御案内申します、どうぞ此方へ」

處へ番頭さんが挨拶に参ります。

「へエ且さん方お早いお着きさまで、只今お風呂が明いて居ります、暫く致しますと道者が澤山這入